

一 軍 人 の 戦 後

—— 岩畔豪雄と京都産業大学 —— (上)

川 合 全 弘

目次

1. はじめに
2. 荒木俊馬と岩畔豪雄
3. 東京事務所長としての岩畔豪雄 (以上本号)
4. 世界問題研究所長としての岩畔豪雄
5. おわりに

1. はじめに

本稿の課題は、次の二点である。すなわち、第一に、京都産業大学史の文脈の中で岩畔豪雄の事績を掘り起こすこと、これである。岩畔は、昭和三十九年二月に京都産業大学創立者荒木俊馬の依頼により大学設立発起人を引き受けて以降、発起人、監事、理事として大学設立に当初から深く関与するとともに、足掛け五年にわたり同大学の東京事務所長兼世界問題研究所長として草創期における大学建設に大きく寄与した⁽¹⁾。それにもかかわらず彼の事績は、今日に至るまで京都産業大学の正史にも部局の記録にもほとんど記されないままにとどまり⁽²⁾、構成員が大きく世代変わりした今日、

(1) 昭和四十五年十一月、岩畔の死去に際して、当時の理事長の小野良介は学校法人を代表して次のような弔辞を述べている。「京都産業大学が創設以来五年有余、その多難な草創期を克服して、大学史上稀れに見るといわれる発展の途を進むことの出来ましたのは、先生の偉大なお力によること極めて大なるものがあったからであります」(小野良介「弔辞」、岩畔伸夫編集・発行『追想記』、昭和四十五年十二月、3頁)。

(2) これには次のような幾つかの理由が考えられる。第一に、学校法人理事会の議事録に東京事務所と世界問題研究所との初期史に関する記述が全くないこと、第二に、世界問題研究所自体においても、昭和四十六年頃まで、後述する「世界問題研究所規定」(昭和四十一年四月一日制定)を除けば、趣意書、会議録、研究会記録、紀要など、総じて世界問題研究所の開設趣旨や活動内容を記録する公式の文書が作成されなかったこと、第三に、世

岩畔豪雄の名は、京都産業大学関係者の間でさえ、ほとんど忘れ去られようとしている。それゆえ、あらためて岩畔の事績に光を当て、それを正しく記録に残すこと、これが第一の課題である。

本稿の第二の課題は、京都産業大学への岩畔の寄与、とりわけ世界問題研究所の創設と同所長在職中に彼がものした二冊の大著⁽³⁾とを、敗戦国日本の軍人による大戦省察の持続的努力の優れた成果として見直すこと、これである。岩畔豪雄は、昭和十四年二月からの約二年間、言わば近代日本の運命が決された時期に、陸軍省軍務局軍事課長の要職に就き、陸軍省の実務⁽⁴⁾を実質的に取り仕切るほどの辣腕を振るった、異能の軍人であった。日米間の国力差を痛感した岩畔⁽⁵⁾は、日米関係が緊迫の度を増す昭和十六年三

、界問題研究所兼東京事務所の施設が昭和五十五年三月まで大学本部から遠く離れた東京に置かれ、その活動実態が岩畔所長および唯一の所員たる若泉敬と、荒木俊馬総長および小野良副理事長という二人の上司と以外からは見えにくかったこと、第四に、秘密戦に通じ、「謀略の岩畔」として名高い元陸軍少将岩畔豪雄も、また、佐藤栄作政権下における日米沖縄返還交渉に「総理の密使」として関与した若泉敬第二代所長も、京都産業大学の埒外にある、日本の言わば大文字の歴史に足跡を残した人物であった事実が、上に挙げた第一から第三の理由と相俟って、周囲により、世界問題研究所の初期史を覆う秘密のヴェールのごとく受け止められてきたこと、第五に、十年毎に作成された大学正史が写真と年表中心の簡略なものにとどまってきたこと、これである。しかし平成十五年に学校法人京都産業大学編『荒木俊馬日記』全四篇が刊行され、また平成二十年に『学校法人京都産業大学五十年史』の編纂が正式に決定されて以来、資料の点でも組織体制の点でも、京都産業大学史研究をめぐる従来の不備がかなり是正されてきた。大学関係者の中に岩畔とその関連人物とを直接知る世代がなお存命する今こそが、大学史に岩畔豪雄の事績を正しく記録する最後の機会であるように思われる。

(3) 岩畔豪雄『戦争史論』恒星社厚生閣、昭和四十二年、および『科学時代から人間の時代へ』理想社、昭和四十五年。

(4) 当時、岩畔課長の下で高級課員を務めた西浦進は、当時の陸軍省における実際の推進力であったのは岩畔かという、インタビューの質問に対して、次のように肯定的に答えている。「それは言えると思いますね。率直な話が、あの時、岩畔さんと〔町尻量基——引用者、以下同じ〕局長と〔山脇正隆〕次官とを比べてみたら誰が一番推進力だったか、大臣は直接五相会議の席へ行って下手な弁説あまりさわやかじゃないあの板垣〔征四郎〕さんが苦労して帰ってくるわけです。(笑い)……それはしかし、板垣さんが中心だと言えばそれは中心かもわかりません。それでこっちへ帰って板垣さんを退けてあと三人を見てみれば、誰が見たってそれは岩畔中心だということは、これは言えると思います」(西浦進『昭和陸軍秘録——軍務局軍事課長の幻の証言』日本経済新聞出版社、2014年、241頁)。

(5) 岩畔は、昭和十四年九月に課員の秋丸次朗に対して列強の経済力調査を密かに命じ、有澤廣巳や武村忠雄、中山伊知郎など名だたる経済学者を集めた研究班「秋丸機関」を組織

月に渡米し、五カ月余にわたり野村吉三郎駐米大使の補佐役として日米交渉に従事した⁽⁶⁾。日米戦争を回避するためのこの最後の努力は、周知のように、結局水泡に帰した。この経緯を念頭におくならば、岩畔にとって日米戦は、彼我の圧倒的な国力差のために最初から確実に敗戦が予想されえた戦争であった⁽⁷⁾、と言ってよい。卑見では、岩畔における日本の無力の自覚と大戦の徹底的な省察の決意とは、戦争末期や戦後になって初めて生まれたのではなく、実はこの時期にまで遡るように思われる。敗戦後二十年間にわたって岩畔が無職の立場を貫いたことは、おそらくこの積年の深く堅い決意⁽⁸⁾に由る。

とはいえ、けっしてこのことは、大戦に臨む岩畔の姿勢が最初から敗北主義的なものであったことを意味するわけでない。むしろ岩畔は、日本の

ゝ させた。秋丸によれば、昭和十六年七月に出されたこの研究班の一応の結論は、「対英米戦の場合、経済戦力の比は二十対一程度と判断する」というものであった。秋丸次朗「秋丸機関の顛末」、『有澤廣巳の昭和史』編纂委員会編『回想——有澤廣巳の昭和史』1989年、66頁。

(6) これについては、岩畔豪雄「私が参加した日米交渉」、岩畔『昭和陸軍謀略秘史』日本経済新聞出版社、2015年、265～340頁、須藤眞志「岩畔豪雄と日米交渉」、『京都産業大学論集（国際関係系列）』昭和五十五年、1～48ページ、および橋本恵「謀略——かくして日米は戦争に突入した」早稲田出版、1999年などを参照されたい。

(7) 米国からの帰国後もあくまで日米交渉継続を唱えたために東条英機陸相の不興を買ひ、駐仏印近衛歩兵第五連隊長として東京を追われることになった岩畔は、昭和十六年八月二十八日、任地に向けて東京駅を発つとき、近づいてきた佐藤裕雄中佐に対して敗戦の予感をこうつぶやいた、という。「今こんなに盛大な見送りを受けて任地に赴くが、若し生きて東京に帰ることありとすれば焼け野原の真只中に残されているプラットホームに独り淋しく降りるであろう」（岩畔「私が参加した日米交渉」、前掲書、337頁）。

(8) 岩畔は、他の多くの軍高官の事例と異なり、戦後一切の定職に就かなかった。その理由をめぐって今に至るまで様々の臆測が生じてきたものの、本稿ではそれらに立ち入らない。本稿の関心にとって重要と思われるのは、岩畔がこの無職の立場に誇りを持っていらしいことである。それは、彼の死後に子息の手によって編まれた追悼文集の冒頭で子息が紹介している次のエピソードからも窺える。「父は『妻子に美田を残さず』の信念をもち、あの戦後の混乱期にもこれという定職に就かず、当時中学に進んだばかりの私は、学校の先生から父の職業を聞かれて答に窮することがしばしばありました。そんなとき、父は、『ワシは天下の無職だぞ、天子さまだって無職だ、と先生に言ってやれ!』と、胸を張っておりました」（岩畔伸夫「御挨拶」、岩畔伸夫編『追想記』巻頭所収）。この無職の二十年は、後に見るように、岩畔にとって大戦の省察を目的とし、読書と思索とに沈潜した二十年でもあった。

国力の貧弱さと総力戦体制整備の遅れとをよく知るからこそ、かえって来るべき大戦に備えるべくこの遅れの挽回にいつそう尽力した。軍事課長時代に岩畔が取り組んだ仕事は、主なものだけでも、日独伊三国同盟の締結促進、総合国策十年計画の立案⁽⁹⁾、戦陣訓の提唱、昭和通商 KK の設立、中野学校の設置、兵器本部と機甲本部の設置、航空軍備の大拡張、総力戦研究所の設置促進など、多数に上る⁽¹⁰⁾。これらは、狭義の軍備だけでなく、外交、思想、経済、情報などの諸分野にわたって、遅ればせながら国家総力戦体制を整備しようとする、必死の努力の表われであった⁽¹¹⁾。貧弱な国力の上に過重の軍備を整えようとする事自体が矛盾した行為であることは否めないものの、この矛盾を解きほぐし、国策を正しく導くことは、いか

(9) これは、武藤章軍務局長の命に基づいて、岩畔が企画院第一部調査官秋永月三大佐と計らい、陸軍嘱託矢次一夫の協力を得て作成した、陸軍省軍務局の非公式案である。岩畔によれば、この十年計画は、「自由主義的臨機応変型の政治を統制主義的計画型の政治に改変する」世界的傾向に呼応し、日本の長期的な国防国策立案の必要に応じるために、「大東亜共栄圏の建設」を目標とする案を具体化しようとするものであった（岩畔豪雄「近衛第2次内閣国策決定の経緯と三国同盟成立当時の陸軍の立場」防衛研究所戦史研究センター資料閲覧室、文庫一委託-107、3～10頁、及び岩畔『昭和陸軍謀略秘史』、161～164頁）。岩畔は、この「総合国策十年計画」の原型ともなった私的試案（国防国策案）を、軍事課高級課員であった昭和十三年に参謀本部第二課の堀場一雄中佐とともに密かに作成している。それによれば、「東亜共栄圏は、自存圏、防衛圏、経済圏から成る。自存圏は大和民族の主体が生存する地域であって、日本領土、満州国領土、北支、蒙疆とする。防衛圏はバイカル湖以東のシベリヤ、支那本土、ビルマ以東の東南アジア、ジャワ、スマトラ、東経百七十度以西の北太平洋海域並島嶼とする。経済圏は東亜共栄圏を膺うに必要な生産的資源供給地域とし、上記防衛圏並に印度、豪州とする」。東亜共栄圏ないし大東亜共栄圏は、このように三重の同心円から構成される日本の広義の勢力圏であり、岩畔はその完成目標を昭和二十五年に置いた。そこに至るまでの岩畔の構えは、次のように和戦両様ながら、軍備の不十分さの自覚から基本的に平和志向である。「東亜共栄圏の完成は努めて平和的手段によるべきも、已むを得ざる場合には武力行使を辞さない。但し、本格的戦争手段に訴えることはなるべく避け、特に軍備の不完全状態における戦争は極力避ける」（岩畔「近衛第2次内閣国策決定の経緯と三国同盟成立当時の陸軍の立場」、5～7頁）。次も参照されたい。防衛庁防衛研究所戦史『戦史叢書 大本営陸軍部大東亜戦争開戦経緯（1）』朝雲新聞社、昭和四十八年、333～339頁。

(10) 岩畔『科学時代から人間の時代へ』の巻末に付せられた著者年譜に、岩畔が当時取り組んだ官制所定の主な業務が列挙されてある。

(11) 岩畔課長の下で軍事課編成班長を務めた大槻章は、岩畔課長時代に軍事課の行った仕事「その量において他の十年分にも比すべく、その質において他に類例が少ない」ことを指摘している（大槻章「追悼記」、岩畔伸夫編『追想記』、22頁）。

に辣腕、異能であったにせよ、陸軍省の一課長にすぎぬ当時の岩畔には、叶わぬことであったにちがいない。岩畔が後半生をかけてやろうとした仕事は、軍人として自らが体现した国策のこの根本的な矛盾を、学問の道において徹底的に省察すること、そしてこの省察に基づき、世界史の趨勢に照らして日本の新しい進路を見定めること、これであった。岩畔による世界問題研究所の創設と二冊の大著との意義を、このことと関連付けて理解すること、これが本稿第二の課題である。

2. 荒木俊馬と岩畔豪雄

岩畔豪雄と京都産業大学設立との接点は、同大学創立者荒木俊馬と岩畔との交友関係にある。岩畔が亡くなった折に荒木が認めた「弔詞」によると、荒木と岩畔との出会いは、昭和二十五年頃に遡る。それ以降、共に一八九七年生まれで同い年の二人は「肝胆相照す仲として親交を結んで」きた、という。荒木は次のように述べている。「あなたと知り合ったのは、終戦後わが国が占領下にあつて、物心両面にわたり貧困と混乱を極めた時でした。当時あなたも私も官職を離れて浪々の身でありましたが、祖国日本の前途を憂え、虚脱状態に陥っている日本民族を、いかにして直直らせるかに就て意気投合したのが交友の始まりでした。爾来二十年、肝胆相照す仲として親交を結んで参りました。その間昭和四十年に私共が京都産業大学を創立するに当りましては、あなたは最も良き協力者の一人として参画され、創立後は理事として学園の興隆にお尽くしくございました。また本学が世界問題研究所を東京に設立しましてからは、その所長として世界⁽¹²⁾ 状況の分析・研究の指導に任じて下さいました」。

荒木は、昭和三十九年二月に、共通の友人である北部邦雄を介して岩畔⁽¹³⁾に京都産業大学設立発起人を引き受けてくれるよう依頼した。発起人の受

(12) 荒木俊馬「弔詞」、岩畔伸夫編『追想記』、1頁。

(13) 『荒木俊馬日記』第二篇、昭和三十九年二月八日及び二月二十一日の条を参照されたい。

なお元陸軍大佐の北部邦雄は、京都市在住で郷友連盟京都府本部の理事長であり、その顧

諾以降、岩畔が最期まで同大学の建設に力を尽くしたことは、先述の通りである。ここでは、荒木が大学の設立と運営に関して岩畔にどのような役割を期待し、他方で岩畔が——戦後二十年間に及ぶ無職の立場を翻してまで——何のために荒木の依頼を引き受けたのかについて、少々考えてみたい。結論を先取りして言うならば、荒木は岩畔に対して何よりもまず東京事務所長としての絶大の役割を期待し、岩畔は自らの発案になる世界問題研究所の設置を荒木に望んだ⁽¹⁴⁾。まずは、荒木の期待から見てみよう。

荒木俊馬は、著名な天体物理学者であると同時に、戦中は大日本言論報国会の活動を通じて、戦後は郷友連盟、自由文教人連盟、全日本教育父母会議などの活動を通じて愛国派言論人として活躍した国士的人物でもある。戦後、荒木はこのような活動のために頻繁に上京し、その際、旧知の出版社たる恒星社厚生閣を東京での活動の足場としてしばしば利用した。荒木はそこで自著の原稿校正や出版打ち合わせを行うとともに、併せてそこを自らの全国的な言論活動の連絡拠点としても用いた。昭和三十七年秋頃からは、京都産業大学設立のための活動がこれらに加わる⁽¹⁵⁾。荒木にとって大

、 間を務めた荒木とは長年の親友であった。また岩畔と北部は、ともに陸士三十期で、戦時中に岩畔機関のそれぞれ長と部下としてインド独立運動を工作した戦友である（岩畔英雄「岩畔機関始末記」、『週刊読究』昭和三十一年十二月八日、118～121頁）。さらに三人は、昭和三十年前後から、北部がその運営に携わっていた日本国策研究会の雑誌『国策』の同人でもあった。

(14) 発足当時、東京事務所と世界問題研究所とは、東京都新宿区大京町の野口英世記念会館の同じ施設内に置かれ、同じ構成員（岩畔所長、若泉敬所員と三名の女子職員）によって担われる、表裏一体の組織であった（若泉敬「世界問題研究所について」、『京都産業大学報』昭和五十一年九月二十日を参照のこと）。しかしながら両組織は当初から名称が異なる上に、後に実態的にも完全に分離され、それぞれ独自の展開を遂げたために、今日ややもすれば、異なる二つの組織が当時たまたま同居していただけであるかのように見られがちである。後年の経過に引き摺られたそのような表面的な解釈法が、今日、東京事務所と世界問題研究所との本来の趣旨の理解を妨げているように思われる。東京事務所と世界問題研究所とは、もともと二枚看板を掲げた同一の組織であり、荒木の期待と岩畔の願望とを共に具現するための、両者の合作にほかならなかった。ちなみに岩畔と若泉は東京在任勤務を認められ、若泉にいたっては教授として採用されながら、当初の数年間授業科目の担当を一切免除されていた。荒木がいかに東京事務所の意義を重視していたかを示す、証左と言えよう。

(15) 『荒木俊馬日記』によると、荒木は昭和三十七年秋頃に同大学創立に着手した。第二篇、ノ

学の設立は、けっしてこれらの活動から離れ、一地方大学の総長の座に収まることを意味せず、むしろ従前の言論活動を引き継ぎ、それを、敗戦後の日本には見られない新たな愛国的大学の創設事業へと昇華し発展させることを意味した。⁽¹⁶⁾ 大学設立計画が本格化した昭和三十八年五月頃以降、荒木の東京出張の頻度は増す。荒木はほぼ毎月東京に赴き、その都度たびたび恒星社厚生閣に立ち寄っている。⁽¹⁷⁾ それゆえ荒木にとって恒星社厚生閣とは、彼の著作の出版業者であっただけでなく、彼が東京で行う言論活動と大学設立活動とのための言わば仮事務所でもあった、と言ってよい。大学が正式に発足した昭和四十年以降、荒木には、もはや恒星社厚生閣という借り物の事務所でなく、自前の事務所を持つことが不可欠と思われたにちがいない。京都産業大学を自らの愛国的構想に基づく全国的水準の高等教育機関へと急上昇させるために、東京に自前の本格的な活動拠点を設けること、そこを通じて人材や縁故や情報を獲得するとともに、大学の知名度を高め全国に卒業生を送り出すこと、荒木にとってはこれが東京事務所設置の理由であった。

その際、荒木がその所長職を岩畔に託した理由は、第一に長年の交友から荒木が岩畔を人物の点でも思想信条の点でも厚く信頼していたこと、第二に政・官・財・学の多様な世界にまことに豊富な人脈を持つ岩

、 197 頁を参照されたい。

(16) 同大学創設を思い立った経緯について、荒木はこう記している。「敗戦後、米国進駐軍の日本弱体化政策の一環として教育基本法が定められ新しい学校制度が敷かれ、従って大学も亦新制大学となって十年、共産党化した日教組の勤評反対その他反政府や労働団体としての政治運動による教育界の混乱、日教組に同調する所謂『新歩的¹大学教授』や『革新的文化人』、それらに率きずられて多くの大学自体と学生自治会の左傾偏向、その結果、全国に瀾漫、猖獗を極め始めた相次ぐ大学騒動。そのような大学の実情を見て、それでは日本将来の運命はどうか、それを思うと、どうしても既成の大学では駄目だから、新しく、次の世代の日本を担って立つ憂国の青年指導者を育成することが必要ではなからうか。……そういう大学を創設したいものだという念願が昭和三十一、二年の頃から私に有ったのである」(『荒木俊馬日記』第二篇、197頁)。

(17) 上京中の荒木の恒星社厚生閣への依存度が尋常でないことは、『荒木俊馬日記』の随所から窺える。たとえば荒木は昭和三十八年五月十三日から二十三日まで東京に滞在し、その間、日記に記された限りでも七度、同社に寄っている。『荒木俊馬日記』第二篇、201～202頁を参照されたい。

⁽¹⁸⁾ 畔がその任に最も適していたこと、この二点であった。第一の点については、先に岩畔に対する荒木の弔詞に見た通りである。第二の点について、つまり岩畔がどれほど豊富な人脈を持ち、またそれを活用して荒木と京都産業大学とのためにどれほど大きな貢献を成したかについて、第3章で具体例に即して見てみることにしたい。

次に、岩畔が荒木の依頼を引き受けた理由を考える一助として、ここでさしあたり世界問題研究所創設の経緯を簡単に整理してみよう。小野良介によれば、世界問題研究所創設の発案者は、岩畔自身であった。小野は、同研究所の創設経緯について、概ね、次のような趣旨を述べている。すなわち、「昭和四十年夏過ぎ」に岩畔から小野に対して「日本の安全と平和の基礎作りをするための研究所」を設立したいとの打診があった。この研究所は、「東京におかねばならず」、「年間予算五千万円」を要する、とのことであった。小野は、岩畔の「将来に対する展望と洞察力とスケールの大きさ」に感銘を受ける一方で、研究所のためだけにそれほどの経費を使うことには「大学発展のためのメリット」がないと判断した。そこで小野は、「近い将来に卒業生の就職問題及び大学の東京事務所を兼ね、大学の知名度をあげ得ることが出来るならば一挙両得と考へ」、年間予算二千万円に減額して了承した、⁽¹⁹⁾ という。『荒木俊馬日記』によれば、その後、昭

(18) 軍事課長時代の情報収集活動の範囲について聴かれた岩畔は、「ぼくは交友の範囲というのは実に広いのだ」と豪語しているが（岩畔『昭和陸軍謀略秘史』、203頁）、それがけっして法螺でなく事実であることについては、多くの関係者の証言がある。例えば、岸信介はこう述べている。「彼の交友範囲は非常にひろく、政財界その他多方面に多数の友人知己をもっていた」（岸「岩畔君を想う」、岩畔伸夫編『追想記』、23頁）。

(19) 小野良介『京都産業大学創立の記』手書文書、昭和五十三年一月、356～358頁。小野は、大学設置認可申請の事務と経理とを一手に担い、昭和四十四年から二年間学校法人京都産業大学の理事長を務めた後、荒木俊馬総長との対立により、まもなく大学を去った人物である。上掲の小野『創立の記』は、後に荒木が大学創立に関して小野に対する非難を含む回顧談を発表した（荒木「本学創立時の『想い出話』」（一）～（五）、『京都産業大学報』、昭和五十年七月二十一日、九月二十二日、十二月一日、昭和五十一年一月十日、四月一日）ため、それに対する反論を企図して書かれた手書きの文書である。荒木との対立を背景とする論争の書であるがゆえに、総じて同書の取り扱いには注意を要するものの、荒木や小野本人に関わる記述は別として、少なくとも岩畔や世界問題研究所関連の記述に限っては、荒木による関連記述と明らかに矛盾するような箇所も、また敢えて虚偽を述べ

和四十一年一月二十二日の理事会において世界問題研究所の設立に関する審議がなされた後⁽²⁰⁾、同研究所は、昭和四十一年四月一日、東京事務所とともに東京都新宿区大京町の野口英世記念会館内に設置された。このように世界問題研究所は、岩畔自身の希望と発案に基づき、そこに荒木および小野の大学経営者としての判断と期待が加わることで、東京事務所と表裏一体の組織として発足することとなった。

要約すれば、荒木は自らの愛国的な大学設立構想に人材と縁故と信用を確保するために岩畔の人脈を必要とし、他方岩畔は、荒木による大学創設への誘いを奇貨として、自らの長きにわたる大戦省察に学問的な形を与えるための場を得ることを望んだように思われる。世界問題研究所の創設と二冊の大著は、この形成努力の成果であった。

以下において、第3章で東京事務所長としての岩畔の活動について、第4章で世界問題研究所長としての岩畔の活動について、考察を加えたい。

3. 東京事務所長としての岩畔豪雄

東京事務所が開設された翌日、すなわち昭和四十一年四月二日に、同事務所において多数の来賓を招いて事務所開きとパーティが催された⁽²¹⁾。『荒木俊馬日記』には、このときの主な来賓として「長谷川才次、星野直樹、文部省斎藤局長、国防会議事務局長北村隆、防衛庁戦史室長西浦進、防衛庁研修所長麻生茂、防衛事務次官三輪良雄⁽²²⁾」の名前が挙がっている。さし

なければならぬ理由も見当たらないことから、同書の信頼度は高いと思われる。

(20) 『荒木俊馬日記』第三篇、25頁。ただし『日記』には記述があるものの、同日の理事会議事録にその記述はない。

(21) 『荒木俊馬日記』第三篇、30頁。ちなみに、前日の四月一日に大学本部で「本年度採用教職員、配置換等約九十人の辞令交付」が行われている(同頁)。そしてその日の午後、荒木と小野は、岩畔および若泉とともに、翌日の東京事務所開所式に出席するため「ひかり号」で慌ただしく東上している(同頁)。大学執行部が年度始めの重要行事をそそくさと済ませ、打ち揃って上京するという、この経緯は、荒木や小野がいかに東京事務所の意義を重く見ていたかを示唆しているように思われる。

(22) 『荒木俊馬日記』第三篇、同頁。

あたり、ここに列挙された来賓と岩畔との関係を手掛かりに、東京事務所長としての岩畔の役割を探ってみたい。

まず目につくのは、大学の事務所開きとしては異例と思える四名の防衛庁関連の高官の出席である。これは、一面では、若泉敬が防衛庁防衛研修所を退職して京都産業大学教授に就任したという、直近の経緯に由るとも言いうる。⁽²³⁾しかしながら他面で、まだ歳若い元部下の移籍先の行事にこれほどの高官が出席することは、それだけの理由なら、むしろ不自然と言うべきである。防衛庁高官と東京事務所とをつなぐ人物は、若泉本人というよりも、むしろ岩畔である。出席した高官の一人、西浦進防衛庁戦史室長は、陸軍省軍務局軍事課長時代の岩畔の元部下であり、自らも岩畔の二代後に軍事課長を務めた。⁽²⁴⁾西浦は、岩畔の最後の著書の草稿をテキストとした勉強会に熱心に参加するなど、晩年に至るまで岩畔と親交を保った。⁽²⁵⁾もう一人の高官、国防会議事務局長北村隆は元内務官僚であり、岩畔によると、岩畔が陸軍省兵務局課員として憲兵関係の事務を担当した昭和十一年頃、内務省警保局員であった北村と一緒に仕事をした、という。⁽²⁶⁾

また防衛庁高官以外で名前の挙がる星野直樹は、かつて満州国國務院総務長官、企画院総裁などを歴任した人物であり、昭和四十一年当時にはダイヤモンド社の会長職にあった。岩畔によると、関東軍参謀として満州国の経済面の指導を担当した岩畔と、大蔵省から満州国財政部に総務司長として移った星野とは、昭和七年に満州国で知り合い、「刎頸の交わり」を結んだ、という。⁽²⁷⁾さらにまた文部省斎藤局長とは、当時文部省管理局長で

(23) 若泉は、昭和四十一年三月に十二年間勤めた防衛庁防衛研修所を退職し、同年四月一日付けで京都産業大学教授に就任した。ときに三十六歳であった。

(24) 日本近代史料研究会編『日本陸海軍の制度・組織・人事』東京大学出版会、1971年、135頁、380頁。軍務局軍事課で二人に仕えた元部下の手になる次の回想録も参照されたい。草地貞吾『将軍32人の「風貌」「姿勢」——私が仕えた回想の将軍たち』光人社、1992年、204頁、303頁。

(25) 岩畔『科学時代から人間の時代へ』、422頁。

(26) 岩畔『昭和陸軍謀略秘史』、120頁。

(27) 同書、49、63頁。星野の手になる次の回想録も参照されたい。星野直樹『見果てぬ夢——満州国外史』ダイヤモンド社、昭和三十八年、51頁。

あった斎藤正を指す。斎藤は、佐藤栄作元首相の首席秘書官を務めた楠田實によると、「京都産業大学の岩畔豪雄氏の旧部下⁽²⁸⁾」であった。岩畔と斎藤の関係の詳細は、管見のかぎり当人たちの証言で裏付けることが出来ないものの、軍歴によると、両者は、昭和十八年にマレー、スマトラ方面の軍政において上司と部下の関係にあつた⁽²⁹⁾。

この事務所開きの事例が示すように、東京事務所の役割は、陸軍時代に培われた岩畔の人脈を、いまだ無名の京都産業大学と学外の広い世界とを円滑につなぐパイプとして活用することにあつた、と言ってよい。このような岩畔の役割は、実質的には東京事務所が開設される以前から始まっていた。それを具体例に即して実証するために、以下において、『荒木俊馬日記』に基づき、岩畔が発起人を引き受けた昭和三十九年二月から昭和四十一年十一月までの期間⁽³⁰⁾に岩畔が荒木と大学とのために行つた仲介業務の中で、——⑩と⑫の林語堂の事例を除き——管見のかぎり岩畔との直接的な関係を確認できる事例だけを列挙してみよう。

- ① 昭和三十九年三月十八日、かねて荒木から推薦の依頼を受けていた京都産業大学ロシア語教員の候補として、岩畔が桜井信太を上京中の荒木に引き合わせる⁽³¹⁾。

(28) 『楠田實日記——佐藤栄作総理首席秘書官の二〇〇〇日』、中央公論新社、2001年、203頁。ちなみに楠田によれば、昭和四十三年四月、文部事務次官の斎藤は、京都産業大学の招きにより昭和四十二年に日本を訪れたアーノルド・J・トインビーへの「叙勲の件」に関して、「岩畔氏からの依頼もあり」、その推進役に回つた、という。同頁。

(29) 当時、岩畔は同地方を担当する第二十五軍の参謀副長兼軍政監部総務部長の職にあり(岩畔『昭和陸軍謀略秘史』、『岩畔豪雄氏略歴』および235頁)、他方、斎藤は陸軍囑託として昭南軍政監部文教科に勤務した(秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』第2版、東京大学出版会、2013年、257頁)。

(30) これ以後は、岩畔に代わって若泉が仲介業務の表に立つ事例が増える。その背景には、病気がちの岩畔(昭和四十二年七月の心筋梗塞による半年間の入院や昭和四十四年春の胃潰瘍手術など——岩畔『科学時代から人間の時代へ』、421頁参照)に代わって、若泉に仕事を引き継ぐ意図があつたのかもしれない。

(31) 『荒木俊馬日記』第二篇、227頁。岩畔が事前に荒木に宛てた推薦状によると、桜井は終戦時に陸軍中佐で、対露暗号解読の専門家であつた(昭和三十九年三月十一日付けで岩畔が荒木に宛てた書簡(京都産業大学大学史編纂室所蔵)。桜井は、昭和四十年の開学と

② 昭和四十年一月三十日、荒井溪吉高分子学会常務理事を訪ねるため、日本橋繊維会館に岩畔が荒木と同行する⁽³²⁾。

③ 昭和四十年二月九日、「お祝挨拶」のため岸信介の事務所に岩畔が荒木と同行する⁽³³⁾。

ㄨ 同時にロシア語担当の講師として採用された。京都産業大学『履修指導と教養課程案内』昭和四十年、3頁、13頁を参照のこと。

(32) 『荒木俊馬日記』第三篇、2頁（ただしここでは荒井溪吉が「荒木溪吉」と誤記されてある）。荒井は、かつて富士紡の機械技師であった昭和十三年頃、デュポン社によるナイロン製ストッキング発売の報に衝撃を受け、ナイロン輸入への対策樹立のため、官民共同体制による合成繊維のプロジェクト研究を推進した。これには、当時の商工省次官岸信介も理事長として関わった。この官民共同の努力が昭和十六年一月に合成繊維研究協会の設立につながり、後に、『荒木俊馬日記』に名の挙がる高分子学会へと発展した、という（荒井溪吉遺稿『戦時追憶の記—— 応召から敗戦・巣鴨までのつれづれ』荒井勝子発行、昭和六十二年、34～35頁、および山本明夫「神原周とその時代—— 第2回 戦中から戦後にかけて」、『高分子』、五十六巻九月号、2007年、768頁）。この合成繊維研究協会設立の時点で、荒井と岩畔との間にすでに接点があったかどうかは不明であるものの、両者の経歴は、それ以後、次のような多くの重なりを持つ。すなわち、荒井は立川第五飛行連隊下級将校として、岩畔は近衛歩兵第五連隊長として、昭和十六年十二月の開戦とともにマレー半島を南下してシンガポールを攻略する作戦に従事したほか、戦時中、共に終始南方軍に属したこと、敗戦間際に両者はそれぞれ陸軍省軍務局勤務（岩畔は軍務局長、荒井は軍務局軍事課員）を命じられ、相前後して飛行機でサイゴンから本土に帰還して敗戦処理に従事したこと、本土帰還の際に荒井は偶々インド独立運動の指導者チャンドラ・ボースと同じ飛行機に乗り合わせ、中継地の台北で飛行機事故によるボースの死の目撃者となったこと、戦後まもなく、両者は松前重義や水野成夫、椎名悦三郎などとともに関分寺にあった陸軍第八研究所の敷地と施設を借り受け、民生科学協会を設立したこと、これである（荒井『戦時追憶の記』20、23～25、66頁、および、岩畔『昭和陸軍謀略秘史』259～260頁。ただし岩畔『昭和陸軍謀略秘史』には荒井が「新井」と誤記されてある。これは、同書が談話速記録であり、岩畔本人の校閲を経ていないことによる、と思われる）。荒井は戦時中に「インド独立運動に参画」した（荒井『戦時追憶の記』29頁）ともいい、また岩畔は民生科学協会設立後まもなく戦犯容疑に問われた荒井を官憲の追及の手から逃がすために荒井に「五万円ぐらいの金」を持たせた（岩畔『昭和陸軍謀略秘史』、260頁）というから、岩畔と荒井の関係はかなり親密であったのかもしれない。

(33) 『荒木俊馬日記』第三篇、3頁（ただしこの日、岸は不在であった）。岩畔と岸との交友関係は、岩畔によると、岩畔が関東軍経済担当参謀や対満事務局事務官として、岸が満州国商工部の総務司長として一緒に仕事をした頃に遡る、という（岩畔『昭和陸軍謀略秘史』、49頁、63頁）。ただし両者が満州国経営に直接携わった時期（岩畔は昭和七年～十一年、岸は昭和十一年～十四年）はかなりずれているので、岩畔の説明は正確でないかもしれない。ちなみに岸は、岩畔への用辞で次のように回顧している。「彼が大東亜戦争に反対した話は有名である。陸軍省の軍事課長時代、米国の戦力論から対米戦争反対を主張したため、軍首脳忌諱にふれ、前線へ左遷されたが、当時主戦論渦巻く軍の中で敢然と

- ④ 昭和四十年三月九日と六月六日、福田赳夫への京都産業大学理事就任の依頼と福田の蔵相就任祝いとに、福田私邸に岩畔が荒木と同行する⁽³⁴⁾。
- ⑤ 昭和四十年七月、岩畔が小野良介と宮野高明とともに、電子計算機センターの設置準備のため、東京の各種計算センターを視察調査する⁽³⁵⁾。

ゝ して非戦論を主張することは生命を賭けなければやれないことであって、大変な勇気が必要とするものであった。その意味で彼の武人としての根性は真正正銘確かなものであったと思う」（岸「岩畔君を想う」、岩畔仲夫編『追想記』、23～24頁）。

(34) 『荒木俊馬日記』第三篇、4、10頁。岩畔と福田の交友の経緯に関して、本人たち自身の証言は管見のかぎり見当たらない。とはいえ両者の経歴は、一時期、次のような接点を持っていた。福田は、昭和九年七月に大蔵省主計局の陸軍省担当主計官となり、昭和十六年に汪兆銘政権の財政担当顧問に就任するまでの七年間、予算編成をめぐる陸軍省との交渉において、若年（1905年生まれ）ながら事務レベルの責任者を務めた（福田赳夫『回顧九十年』岩波書店、1995年、35～47頁参照）。他方岩畔は、昭和十三年三月から十四年三月まで陸軍省軍務局軍事課高級課員を、十四年二月から十六年二月まで軍事課長を務めた。軍事課は陸軍省の予算要求作成を主管する部署でもあったから、岩畔と福田は、当時少なくとも間接的には知り合いであったはずである。

当時、大蔵省主計官としての福田の、陸軍省側における直接的な相手方を務めたのは、その頃岩畔の直属の部下であった西浦進である、と思われる。西浦は昭和十二年八月から十四年三月まで陸軍省軍務局軍事課予算班長を、十四年三月から十六年十月まで軍事課高級課員を、十七年四月から十九年十二月まで軍事課長を務めた（秦郁彦編『日本陸海軍総合事典』第2版、東京大学出版会、2005年、310頁）。木戸日記研究会による談話聴取において、西浦は、軍事課長時代に「陸軍以外の人たちで非常によく接触をした方」は誰かという問いに対して、海軍の関係者などの名前を列挙した後、特に福田の名前を挙げつつ、こう答えている。「それから大蔵省では、いまの〔自民党——引用者〕幹事長の福田赳夫、その時分には大蔵省のどこかの課長をやっていましたが、前は陸軍省関係の予算の主任者ですから」（西浦進『昭和陸軍秘録』、415～416頁）。西浦によると、「陸軍予算の担任者」であった福田は「大蔵官僚としては幅もあり政治性のある人で、仕事はやりやすかった」といい、昭和十三年春に福田とともに「満州、北支を視察した」こともある、という（西浦進『昭和戦争史の証言——日本陸軍終焉の真実』日経ビジネス人文庫、2013年、154～155頁）。

このように、岩畔と福田の関係は、戦後に初めて結ばれたわけではなく、むしろすでに戦争期に陸軍省と大蔵省との間での陸軍予算編成作業を舞台とし、恐らくは西浦を介して、成立した、と言いうる。

ちなみに小野良介によると、昭和四十年一月九日に京都ホテルで開かれた第一回役員会において福田を理事に推薦したのは、福田と「昵懇の間柄」である岩畔であった、という（小野『京都産業大学創立の記』、304～305頁）。

(35) 荒木雄豪・宮野高明「京都産業大学計算機科学研究所創立経過」、『京都産業大学計算機科学研究所彙報』創刊号、1968年、5～6頁。

- ⑥ 昭和四十年九月二十七日、ダイヤモンド社に星野直樹会長を訪問するため、岩畔が荒木と同行する⁽³⁶⁾。
- ⑦ 昭和四十一年一月二十七日、岩畔が、上京中の荒木に若泉敬を引き合わせる⁽³⁷⁾。
- ⑧ 昭和四十一年三月、岩畔の要請により、草地貞吾が京都産業大学追分寮の寮監長に就任する⁽³⁸⁾。
- ⑨ 昭和四十一年四月二日、東京事務所の事務所開きに岩畔と若泉が荒木および小野と共に出席する⁽³⁹⁾。
- ⑩ 昭和四十一年八月十二日、「林語堂氏の件」で、岩畔と若泉が東京より大学本部の荒木のもとへ「李氏」を案内する⁽⁴⁰⁾。
- ⑪ 昭和四十一年十月十二日、岩畔と若泉と小野が、西浦進戦史室長と浅野祐吾幹部学校長とを大学本部の荒木のもとへ案内する⁽⁴¹⁾。

(36) 『荒木俊馬日記』第三篇、16頁。実現はしなかったものの、荒木は星野を理事に招こうとしたようである。『荒木俊馬日記』の昭和四十一年一月二十二日のくだりに、当日の理事会の議題として次のように記録されてある。「欠員理事にダイヤモンド会長星野直樹を委嘱の件」(同書、25頁)。

(37) 『荒木俊馬日記』第三篇、26頁。この引き合わせは、おそらく、同月二十二日に審議された世界問題研究所設立のための採用人事面接であろう。ただし若泉と荒木との初対面は、ひょっとしたらこの日のことでなく、さらに以前に遡るかもしれない。というのも、昭和四十年十一月二十七日に催された京都産業大学開学式の式典招待者名簿に、すでに若泉の名前が見えるからである(「開学式式典招待者名簿」、京都産業大学大学史編纂室所蔵)。小野に対する岩畔の研究所設立の打診がすでに昭和四十年夏過ぎに行われ、また若泉の採用人事が防衛庁防衛研修所から京都産業大学への若泉の移籍を伴うことを念頭に置くならば、関係者による研究所開設への下準備が実質的にはすでに昭和四十一年一月のかなり以前から始まっていた、と見る方が自然であろう。

(38) 草地『將軍32人の「風貌」』「姿勢」、207頁。同書によると、元陸軍大佐草地は昭和四十年の末に岩畔から要請を受け、昭和四十一年三月から昭和四十二年三月までの一年間、新設されたばかりの追分寮の寮監長を務めた。岩畔が様子を見に追分寮に立ち寄ることもあった、という。草地については、上掲註24も併せて参照されたい。

(39) 『荒木俊馬日記』第三篇、30頁。

(40) 同書、39頁。「李氏」が誰を指すかは不明であるが、同年十一月に予定された京都産業大学への林語堂招聘の関係者であることは間違いない。

(41) 『荒木俊馬日記』第三篇、44頁。元陸軍少佐浅野は岩畔の元部下で、岩畔から「旧陸軍において公私にわたって親身も及ばないほどの数々の指導を受け続けた」という(浅野祐吾「この本を読むひとのために」、岩畔『科学時代から人間の時代へ』、409頁)。『荒木俊馬日記』には「幹部学校長」とあるが、おそらく陸上自衛隊幹部学校教官の間違いであろう。

- ⑫ 昭和四十一年十一月十五日、伊丹空港に到着した林語堂夫妻を、若泉が荒木とともに⁽⁴²⁾出迎える。

これらの事例は、⑤と⑧を除いてすべてが『荒木俊馬日記』に拠る。岩畔による記録は残念ながら①の註31に挙げた書簡以外に見当たらないので、荒木と大学とのために岩畔が行った仲介活動の全貌は定かでない。とはいえ、記録によって裏付けられるこれら最初期のわずかの事例を一瞥するだけでも、岩畔と東京事務所との活動内容があらあら浮かび上がってくる。上記の事例は、その性格に従って、概ね次の四つに分類しうる。

第一の類型は大学人事のための人物紹介であり、①、⑦、⑧がこれに該当する。なかでも⑦に挙げた若泉の事例は、この類型の中で岩畔最大の功績と言えよう。というのも、若泉は、岩畔の跡を襲って第二代の東京事務所長兼世界問題研究所長となり、草創期の大学発展の大きな牽引力と成ったばかりでなく、日米交渉史においても岩畔の先例に倣う大きな足跡を残したからである。⁽⁴³⁾ 上述の時期の後にも、岩畔との直接的な関係を確認でき、

(42) 『荒木俊馬日記』第三篇、47頁。来日した林語堂は、同年十一月十九日と二十一日の二度にわたって講演を行った。この林語堂招聘が、その後、昭和四十二年のアーノルド・J・トインビー、昭和四十三年のハーマン・カーンと続く、京都産業大学による世界的知識人の招聘事業の先駆けとなった。なお、この日の林語堂出迎えに岩畔の名前は見当たらない。トインビーとカーンの来学に際しても、岩畔は病を押して両名と対談を行っているものの、招聘の実務に当たったのはいずれも若泉であった。

(43) 岩畔と若泉の出会いの経緯は、管見のかぎり定かでない。若泉の評伝を著した森田によると、昭和二十九年四月に防衛庁防衛研究所の前身たる保安庁保安研修所に助手として採用されるに先立って、若泉は東大の恩師の矢部貞治の推薦を得、保安研修所副所長の松谷誠の面接を受けている（森田吉彦『評伝 若泉敬——愛国の密使』文春新書、二〇一一年、76～77頁）。松谷は、かつて岩畔課長の下で軍事課編成班長を務めた、岩畔の元部下である（日本近代史料研究会編『日本陸海軍の制度・組織・人事』、380頁）。矢部は、敗戦後まもなく松谷らとともに催した勉強会（団子坂の会合）で、たびたび岩畔と顔を合わせた間柄である（日記刊行会編『矢部貞治日記 櫻の巻』読売新聞社、昭和四十九年、2、5、7頁、および大谷伸治「松谷誠陸軍大佐グループの活動——新憲法を先取りした「団子坂研究会」——」、『日本歴史』吉川弘文館、2016年4月、55～64頁）。また当時の保安研修所所長で後に国会議事事務局長となった北村隆と防衛研究所戦史室長の西浦進もまた、すでに見たように、それぞれ岩畔と旧知の仲である。それゆえ出会いの詳細は不明であるものの、若泉は、すでに少なくとも保安（ないし防衛）研修所勤務の頃から広い意味で岩

この類型に数え入れうる岩畔の活動事例として、昭和四十四年二月における石田正美の京都産業大学理事および事務局長⁽⁴⁴⁾就任が挙げられる。石田は、後に若泉の跡を継いで第三代目の東京事務所長にも就いた。

第二の類型は大学の設備（とりわけ電子計算機）充実のための支援であり、⑤がこれに属する。岩畔は、計算機科学の教育と研究を重視する京都産業大学の基本方針策定に早くから関与していたようである。これについて荒木雄豪と宮野高明は次のように述べている。「当大学に於ける計算機科学教育及び研究に関する胎動は遠く開学以前にさかのぼる。未だ大学に於ける計算機教育の必要性や重要性が我国に於いて話の端にもものぼらなかった頃からすでに京都産業大学の設立とむすびつけて、計算機科学教育及び研究が論じられていた。現京都産業大学学長荒木俊馬、同副学長小野

、畔の人脈の中にあつた、と言いうる。

岩畔と若泉の関係について今一つ考慮すべき点は、福田越夫が昭和四十年三月に岩畔の推薦で京都産業大学理事に就任している事実である。自民党幹事長の福田は、昭和四十二年九月二十九日、佐藤栄作総理からの「密使」要請を若泉に伝えた、当の人物である（若泉敬『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス 新装版——核密約の真実』文藝春秋、2009年、34～35頁）。福田越夫を中間に置くとき、若泉と岩畔とを結ぶもう一本の——京都産業大学にとっては埒外の——線が浮かんでくるようにも思われる。すなわち日米沖縄返還交渉における密使役とその掩護役という関係がそれである。この線は、岩畔がなぜ福田を京都産業大学理事に推薦し、またなぜ若泉を世界問題研究所教授に推薦したのか、という問いとも関わる。とはいえ、これは今のところ筆者の臆測の域を出ない。ちなみに若泉は、この点に関連して、岩畔に荒木と小野を加えた、当時の京都産業大学の上司三名が暗黙裡に彼に与えてくれた「モラル・サポート」に言及している（同書、69～70頁）。

(44) 『京都産業大学報』創刊号、1頁。元陸軍少尉石田正美は、岩畔の近衛歩兵第五連隊長時代の部下（岩畔『シンガポール総攻撃——近衛歩兵第五連隊電撃戦記』光人社NF文庫、2000年に、石田は「連隊旗手」として度々登場する）であり、国策パルプ工業KKに勤務していた昭和四十一年頃から、世界問題研究所における岩畔の勉強会に出席していた。石田による次の回顧談を参照されたい。石田「次の飛躍を期して」、『京都産業大学同窓会報』第十六号、94頁。さらに彼の次の著作のあとがきも参照されたい。石田雅己『新しいアジア開発の現実』ダイヤモンド社、昭和四十五年、207～209頁。「石田雅己」は石田正美の筆名である（同書著者略歴参照）。ちなみに石田が勤務した当時の国策パルプ会長水野成夫は、戦前に共産党からの転向後、岩畔の厚い支援を受け、岩畔がインド独立運動工作に従事した折に、岩畔に献身的に協力した、という。次を参照されたい。境政郎『水野成夫の時代——社会運動の闘士がフジサンケイグループを創るまで』日本工業新聞社、平成二十四年、313頁、318～325頁。また水野自身も、「岩畔さんは私や南喜一君を世の中に出してくれた恩人です」と語っている（岩畔伸夫『追想記』66頁）。

良介および同世界問題研究所所長岩畔豪雄の諸氏により、あらゆる角度からこの問題について検討が進められ、……計算機科学教育と研究のための設備を整える方針が昭和三十九年にすでに決定されていた⁽⁴⁵⁾。電子計算機に対する荒木と岩畔の強い関心とこれに関する岩畔の仲介活動とは、実は、京都産業大学創立の話が生まれるずっと以前に遡る。『荒木俊馬日記』によれば、昭和三十二年一月二十八日、荒木は、「岩畔の案内で」電子計算機ユニヴァックの見学に東京の吉沢会計機株式会社を訪れている⁽⁴⁶⁾。

第三の類型は世界の碩学の招聘事業であり、これの最初の事例として⑩と⑫が挙げられる。註42で触れたように、岩畔は、昭和四十二年十一月におけるアーノルド・J・トインビー招聘や、昭和四十三年十月におけるハーマン・カーンの招聘に際して、それぞれトインビーおよびカーンと対談を行った⁽⁴⁷⁾。

第四の類型は政・官・財・学界における縁故の獲得であり、②、③、④、⑥、⑨、⑪の諸例がこれに当たる。この類型の特筆すべき事例として、岸信介と福田赳夫の例が挙げられよう。京都産業大学の最高顧問に就任した岸は、開学に向けた最初の『要覧』に自らの顔写真と「前内閣総理大臣」の肩書とを付して署名入りの推薦文を寄せ、福田赳夫は昭和四十年三月に

(45) 『計算機科学研究所彙報』創刊号、5頁。

(46) 『荒木俊馬日記』第二篇、158頁。1951年に発売されたユニヴァックIは世界最初の商用コンピューターであり、吉沢会計機株式会社はユニヴァック社の日本総代理店であった。ちなみに同社社長の吉澤審三郎は、かつて三井物産に勤務した頃、上司の石田礼助の指示で欧米に統計機械の調査に赴いた、日本における統計機械システム導入の先駆者の一人である。吉澤と岩畔との直接の接点は不明であるものの、吉澤のかつての上司の石田と岩畔とは、幾つもの接点を持つ。例えば、岩畔は参謀本部第八課勤務の頃、「青年文化協会」設立のため、当時三井物産常務であった石田と掛け合って資金を提供してもらい（岩畔『昭和陸軍謀略秘史』、71頁）、また軍事課長の頃、昭和通商という陸軍肝いりの国策会社の設立に際して石田の協力を得た（山本常雄『阿片と大砲——陸軍昭和通商の七年』PMC出版、1985年、38～39頁）、という。

(47) これらの対談記録は、次の書に収められている。岩畔『科学時代から人間の時代へ』、367～385頁、およびハーマン・カーン『日本未来論』読売新聞社、昭和四十四年、149～186頁。

(48) 『京都産業大学要覧 1965』、1頁。

理事に就任した。⁽⁴⁹⁾かかる縁故の獲得には、恐らく、上述の三類型の活動を助けることへの期待とともに、いまだ無名の大学に、有形無形の信用と後ろ盾、将来の卒業生の就職先、受験界での好評などをもたらすことへの期待が託されたことであろう。昭和四十一年度向けの『要覧』では、この期待が実に率直な仕方ではっきりと表明されている。『要覧』は、理事会の構成員紹介欄に福田の名前を挙げるとともに、「就職斡旋について」という別の欄で岸の名前を特筆しながら次のように述べている。「本学の第一回卒業生が社会に出るのは、昭和44年であるが、その就職については全学をあげて完璧を期し、万全の準備をしている。即ちわが学園はその建学の精神を産学協同におき、産業界が真に要望している人材の養成を本来の目的とした教育方針をとっているため、産業界に受けいれられやすく、すでに本学の卒業生ならば引きうけようとの意向をもらしている企業も少なくないし、また最高顧問に前内閣総理大臣・岸信介氏ほか、二十数名の政界、財界の有力者を顧問に擁しているので、卒業生の前途は卒業時の経済界の状況がどうであろうと明るいものがあると断言してよい⁽⁵⁰⁾」。

このように、岩畔は、荒木や小野の期待に副い、東京事務所長としての幅広い人脈と草創期の京都産業大学との間を精力的に仲介した⁽⁵¹⁾。京都

(49) ただし福田は、昭和四十三年十二月二日に辞職するまで一度も理事会に出席しておらず、大学経営に対する福田の実質的関与はない、と思われる。小野によると、福田は、理事就任に際して「理事会には出席出来ない、責任も持たない、報酬も一切受けないという条件」を提示した、という（小野『京都産業大学創立の記』、305頁）。註43の後半で述べたことと関連して、このことも意味深長であるように思われる。

(50) 『要覧 京都産業大学 Introduction to KYOTO SANGYOU UNIVERSITY '65-66』。

(51) 岩畔の人脈の幅広さは、かつて国家総力戦体制の整備に向けた日本陸軍の多種多様な活動の中で、彼が様々な要職に就き、そこにおいて戦争の科学化と国力の総動員との必要という明確な問題意識を持って精力的に活動したこと、それを通じて軍の諸部門とのみならず、産業と行政と学問の諸領域と密接な交渉を持ったことに由来する。秘密戦に精通し、「謀略の岩畔」と呼ばれた岩畔は、他面で、陸軍省整備局統制課課員、関東軍経済担当参謀（満州国の内面指導）、参謀本部第一課参謀（作戦資材業務、総動員業務担当）、対満事務局事務局（満鉄と満州電電会社の監督）、軍務局軍事課長（総力戦体制整備の司令塔）などの経歴を通じて、統制経済を組織する「経済参謀」の顔を併せ持った。一例を挙げれば、彼は、整備局統制課で膨大な種目数——岩畔によれば「五万種」——に上る作戦資材（軍需品）の製造、徴発、整備などの計画を担当し、「その時に物というものが徹底に

産業大学のとりわけ初期史における岩畔の事績は、岩畔への弔辞で小野や荒木が認めた通り、まことに大きいものであった、と言わなければならない。

-
- ㄨ わかりましたよ。今日、ですから物というものに対しては案外興味を持っています」と述べている（岩畔『昭和陸軍謀略秘史』、27頁）。岩畔のこの経歴と、本文で引用した『要覧』にある京都産業大学の「建学の精神」としての「産学協同」とを念頭に、東京事務所長としての岩畔の役割をより明確に特定してみるならば、それは、岸信介や星野直樹、椎名悦三郎、福田赳夫、西浦進、水野成夫、荒井浜吉といった、かつての総力戦体制の推進者人脈を、高度経済成長と国際的産業競争との時代背景の下、「産学協同」の理念を通じて京都産業大学に再び結集し、日本の産業社会を担う中堅的な人材育成のために活用することにあった、と言えるかもしれない。東京事務所の役割が何であったのかという問題を、一大学史を超える、より大きな歴史的文脈の中で考察するためには、岩畔の人脈だけでなく、東京事務所の設置者たる荒木俊馬の大学観をも併せて考えることが必要となる。岩畔の人脈がそうであったように、荒木の「建学の精神」としての「産学協同」もまた戦時期にまで遡りうるものであった。戦時期における荒木の愛国主義的言論活動は、日本の国力向上の観点から、明治以来の知的エリート主義を打破し、科学技術の振興とそのための高等教育の大衆化とを要求する革新的な性格を有していた。この点で荒木の大学観は、戦後改革の所産たる新制大学の大学像と実は通底する。荒木にとって、新制大学の最大の問題点は、註16で見たように、それが「左傾偏向」教育と政治化した学生運動との巢窟となっていることにあった。それを是正し、愛国心を媒介として科学技術と産業社会とを結び付けること、ここに荒木の「建学の精神」としての「産学協同」の趣旨があった。なお荒木のこの大学観について、学部同僚の溝部英章教授から多大の教示を受けた。ここに記して感謝申し上げる。